もくじ

きずなづくり大賞に寄せて　社会福祉法人　東京都社会福祉協議会　会長　古川貞二郎

東京都知事賞

あさやけ子ども食堂　山田和夫……3

東京新聞賞

歌で心を一つに　吉田由紀子……11

東京都社会福祉協議会会長賞

エミおばあちゃんのほほえみに
～畑がつなぐ地域と命のきずな　小池常雄……19

絆インフラ作り　大久保淳一……28

ＰＡＲＴＹ！　内山美津子……39

僕のクラスメイト　勝見恭子……46

落人味噌出来ました　市川富茂……54

つながり　菊地正行……61

きずな　田口賢持……67

運営委員会委員長賞

夢見るように深く植えよ「植樹プロジェクト」
～地域のきずなと風景を生み出す公園整備活動～　大垣内　弘　美……73
つながりの結婚式　佐　藤　綾　奈……80

（東京都社会福祉協議会会長賞、運営委員長賞は受付順で掲載しています）

きずなづくり大賞２０１４～地域や家族の多様な「つながり」をつくろう～資料

※作品の著作権は東京都社会福祉協議会に属します

作品の個人名の表記については、作者より、ご本人の了解をいただいています

（一部仮名の場合もあります。）

きずなづくり大賞に寄せて

社会福祉法人　東京都社会福祉協議会　会長　古川　貞二郎

東日本大震災から4年の歳月が経とうとしています。災害という厳しく辛い経験の中から私たちが学んだのは、「家族」、「地域」、「仲間」というつながりの大切さでした。全国や世界各地から集まってきた温かい支援に対して、日頃気がつかなかった「見えないつながり」を感じた方も多かったのではないでしょうか。形あるものは地震や津波で失われましたが、人と人との絆は災害を通してさらに強いものになっていったように思います。

その後、本会でも、首都直下型の地震に備え、行政や福祉施設・ＮＰＯ等と連携しながら、災害に強いまちづくりを進めていますが、人と人とのつながりの希薄さが大きな課題となっています。

２０１０年の国勢調査によると東京都の単独世帯は約３００万世帯となり、総世帯数の

約46％を占めています。学生や独身の若者も多いのですが、ひとり暮らしの高齢者世帯が増加し、全世帯の約1割にまでなりました。私たちが暮らす大都市東京には、いろいろな生活課題を持っているにも関わらず、遠く離れた家族にも、身近な地域社会の人たちにも相談できずに孤立しがちな人たちがたくさんいるのです。

こうした中、今回の「きずなづくり大賞」では、家族や地域の多様なつながりを表現した作品を数多くいただき、市民同士が工夫しながら支えあっている素晴らしい実践が紹介されています。

退職した男性が自宅を開放し、親の帰りが遅い子どもたちや、赤ちゃんを抱えたシングルマザーのために始めた食堂のお話、知的障害のある人たちと高齢者施設の方々との歌を通した交流、高齢のために耕作できない畑で地域の子どもや大人たちが農業をしながら、人や自然とのつながりを回復していく取り組みなどを読んでいるうちに、心がだんだん温まってきました。

また、大病を患った経験から、患者さんやその家族の孤独に気づき、インターネットで支えあえるシステムを作ったり、アウトドアでの結婚式をいろんな方たちと一緒に創り上

げていったりと、新しい時代のつながりを感じさせてくれる作品もあります。過疎化の進む地域で、伝統的な食文化を活かしたビジネスを始めた高齢者の方々のお話も大変ほほえましく、元気をいただきました。

ぜひ、多くの方々にご一読いただきながら、身近な方々とのつながりをもう一度見つめなおし、大切に紡いでいっていただくことを心から願っております。

東京都知事賞

東京都知事賞

あさやけ子ども食堂

山田　和夫　66歳（東京都豊島区）

自宅を改装して私の妻が25年前にパン屋を始めました。天然酵母にこだわったパン屋です。自宅には早朝からパン職人さんが出入りをして、いつも賑やかでした。地域のいろんな方がパンを買いに、家を訪れておりました。ですが生憎、五年ほど前に病に倒れ、亡くなりました。

同じ頃、私はサラリーマンとして勤めた会社を定年退職し、さらに原発事故の影響で息子夫婦が関西に移住し、誰も家にこない、電話もならない、一人暮らしの日々を過ごすことになりました。あの頃はどん底だったと思います。

そんなある日、大田区で「子どものための食堂」をやっていると教えてくれた方がいて、さっそく見学に行きました。子どもたちが集まって、美味しそうにご飯を食べて、一家団

欒の暖かさがあり楽しそうでした。これと同じことを要町の私の家を開放して出来ないだろうか・・・

地域の方に声をかけられ参加した「豊島子どもＷＡＫＵＷＡＫＵネットワーク」の集会で、「子ども食堂、やってみたい」とつぶやいてみましたら、代表の栗林さんが聞き逃さず、その場で多くの方の賛同を得て引くに引けずに、「やりましょう」ということになりました。

それからの準備は大変でした。保健所の営業許可をとるために、少し家の工事をしました。食材をどうするか、調理のスタッフをどうするか、子どもは来るだろうか。いろいろ心配事がありましたが、妻が残しておいてくれた地域のネットワークで手伝ってくださる方が次々とあらわれ、とうとう２０１３年の春に、「要町あさやけ子ども食堂」がオープン出来ました。長い夜が終わって、もうじき夜明け、でも今はまだあさやけの時。そんな気分で名前をつけました。

「子ども食堂」は、子どもだけでも入れる食堂と銘打って、一食３００円で夕食を提供しています。第一・第三水曜日の17：30～19：00にオープン。食堂には、親の帰りが遅く夕食を一人だけで食べていた子や、不登校だった子、赤ちゃん連れのシングルマザーなど

が立ち寄ります。みんなで同じご飯を一緒に食べる。食べた後は、幼児から高校生の年代の子までが、一緒になって遊びます。子どもたちはすぐに仲良くなるのです。一軒家なので、階段をのぼったり降りたりするだけでも楽しいようで、上の部屋では段ボールハウスの秘密基地やお化け屋敷ごっこが始まったり、みんなとっても楽しそうです。

6人に1人の子どもが貧困状況にあるといいます。私たちの子どもの頃は、みんな貧困でした。こんなに豊かな世の中になったのに、格差が広がっているようです。どの子も幸せになってほしいと思います。

お店の看板は、母子家庭のえむちゃんと、祖父母に育てられているわい君が作ってくれました。わい君は手先が器用で、上手に木を彫ってくれました。将来家具職人になりたいそうです。そこにはえむちゃんが描いた、カエルの絵があります。えむちゃん曰く「おせっかえる。おせっかいをされた子がおとなになっておせっかいを返すから。おせっかえるは、やさしいピンク色なの。」

お料理は、調理を担当してくれるスタッフに加え、ボランティアをしたいという方が次々と来られ、学生さんからお年寄りまで老若男女が入りまじり、わいわいみんなで作ります。

お手伝いしてくださる方々にとっても、ここが居場所になっているのを感じます。

軌道にのってきた頃、「子ども食堂」のことが、新聞やＴＶに紹介され始めました。それをご覧になった全国の方々から、様々な支援をいただいております。自然栽培で作られた、お野菜・お米・味噌・じゃがいも・ジャムなどの食材や、手作りの布フキン・お寺からの「おやつのお裾分け」遠い所ではスペインの在留日本人の方が、実家の北海道から新巻鮭を送っていただくなどです。先日は、70すぎの男性からお手伝いの希望を頂きました。永年お寿司屋さんをやっていたそうで、子どもたちにお寿司を握ってあげたいそうです。年末のお楽しみ企画で活躍してもらいます。困っている子どもに何かできることをしたいと思ってくださる方がたくさんいらっしゃるんだなと思いました。そんな方々との交流も、有難く思います。

小学生の女の子ですが、学校でイジメにあい、教室に行けずに、時々保健室に登校していたそうです。その子が、子ども食堂に来るようになりました。次第に、食べるだけでなく、お料理を運んだり、皿洗いなどのお手伝いをし始めました。そのうち、早くから来るようになり、マイスリッパを持参してまで、お料理作りに参加し始めました。小さい子ど

もたちとの遊び時間には、お姉さん役をやっています。この頃では、取材を受けると、自分の思っていることや考えていることを堂々と話せるようにすらなっています。

ある日、あまりの人の多さに靴を数えたら、50足あったこともありました。よくまあ、この家に50人も入るものだとびっくり。私自身、どん底だったときを振り返ると、とっても賑やかになって、こんなに幸せなことはありません。

オープンしてから一年半ほどになりますが、素敵なことがたくさん起こっています。誰がどうしたと言うわけではなく、子ども食堂という「場のちから」がそうさせているような気がします。

これからも、元気な限り、この活動を続けていきたいと思っています。

東京新聞賞

東京新聞賞

歌で心を一つに

吉田　由紀子　66歳（東京都練馬区）

「おじいさん、おばあさん、こんにちは。私たちあかねの会音楽クラブでは、毎年、この福祉の里に来ることをとても楽しみにしています。今年もみんなでやってきました。」

知的障がいのA男さんが緊張しながらも堂々と挨拶をして、全員の合唱が始まった。あかねの会で知的障がい者の余暇活動の一つとして行っている音楽クラブのメンバーが福祉の里の老人ホームを訪れるのは、今年で8年目になる。

1年目は、ご老人の前に立って歌うだけで精一杯だった。でも、「おじいさんが一緒に歌ってくれて嬉しかった。」と涙を流しながら話すメンバーが何人もいた。

2年目からは、歌い終わった後、おじいさんとおばあさん一人一人に握手をして退場した。

「若い人の手はあったかい。」と嬉しそうに手を握り返され、あかねの会のメンバーも嬉しそうだった。

「また来てください。」と言われたが、障がい者団体の慰問は異例のようで、何か申し訳なさを感じながらも、障がいのある人たちも役に立てることがあるなら、こんな嬉しいことはないと思い、それ以来、毎年老人ホームを訪問している。

歌詞を覚えるのにも時間がかかるメンバーだが、ご老人たちのよく知っていそうな昔の曲を練習して、暗譜で歌えるようにして、毎年8月に老人ホームを訪れてきた。

今年は老人ホームの玄関に着くなり、一人の車いすのおばあさんが寄ってきて、

「待ってたのよ。」と思わず握手を求めて下さった。私が握手の手を握り返すと、肩に抱きついて、

「ああ、嬉しい。また歌が聞ける。楽しみ。」と、ニコニコして言って下さった。

ホールに50～60人集まった老人たちを前にして、A男さんの挨拶の後、ご老人たちと一緒に歌える歌を10曲ほど歌った後、今年は全員が両手に紙で作った色とりどりの花をつけ、「花は咲く」を歌った。

一度、皆が歌った後、「花は花は花は咲く・・・・」の部分の手話をご老人たちに覚えて頂き、もう一度、歌と手話で合唱した。

皆の両手につけた色とりどりの花が歌に合わせて揺れる。手話リーダーの動きに合わせてご老人たちの両手で作った花が揺れる。麻痺して動かない手をもう片方の手で持ち上げ、何とか動かそうとしているおじいさんもいた。50～60人のご老人たちの手の動きが歌に合わせ増えていき、最後には会場全体に広がった。

知的障がい者の彼等とご老人の心が歌に合わせてつながり、会場一杯に一体感が広がった。そして歌い終わった後、思わずお互いに拍手しあった。しばらく拍手が続いた。職員の方が、普段反応が殆どないご老人が手を動かしたことにびっくりし、喜んで下さった。

そしていつも最後に歌う「われもこう」は、あかねの会の理念を盛り込んだ歌である。

「われもこうの花は小さい。だから誰も気がつかない。でもわれもこうは誰かのために何かをしたい。何かの役に立ちたい。ずっとそう願ってる。私も誰かのために何かをしたい。私も誰かの役に立ちたい。とても小さくて目立たない花でも、力一杯に咲いて、咲いて、咲き続けたい」

老人ホームの職員の方が、帰り際、
「みんなご老人たちを元気づけてくれてありがとう。みなさんは障がいがあっても本当に役に立っていますよ。」と呟くように声をかけて下さった。
「『花は咲く』で、おじいさん、おばあさんが一緒に手話をしてくれて嬉しかった。」という感想を言うメンバーが多かった。老人ホームの職員の方からも
「来年もまた来てください。絶対待っています。」と力強く声をかけられ、彼等も
「また来ます。」と手を振りながら大きな声で答えていた。
車いすのおばあさんが、玄関まで来て下さり、
「楽しかった。また来てくださいね。」と名残惜しそうにいつまでも手を振って下さった。
しかし、知的障がいの彼等にはできないことが多い。帰り際、スリッパを脱いで自分の靴を履くのにも手間取り、スリッパの片づけや靴を入れていたビニール袋の始末まで回りの人が見かねて手助けせざるを得ない。歌詞も覚えられず、全部の曲を歌えないメンバーも多い。
そんな彼等でも、皆で歌うことでご老人達の笑顔を引き出すことができ、また来年来て

ほしいと期待される存在になれた。障がいを持っていても、人のために何かができる。役に立つ存在になれるのだ、われもこうになれるのだと、私も確信できるようになった。

彼等の顔も晴れ晴れとし、嬉しそうだった。達成感で満たされた顔が輝いていた。認知症が進み、家庭で過ごすことが難しくなったご老人たちと知的障がいの人たちとのつながりが、8年という長い時間をかけて熟成され、心のつながり・本当のきずなが出来上がってきたと実感する。

あかねの会では毎年コンサートも開いている。毎年千人近いお客様で満場になり、温かい励ましに満ちたアンケートをたくさん頂くコンサートが、今年で17回目になる。多数の人から励ましをいただくそのコンサートも彼等にとって輝く時間ではあるが、病気のご老人たちを元気づけることができる、一緒に歌えるという体験のもてる老人ホームの訪問の方が彼等の心を強く打つのだということに不思議さを感じると共に、心の交流の大切さを改めて思い知った。

これからも夏になると福祉の里を訪れることが彼等の楽しみになり、さらにきずなが深まっていくだろうと思うと、本当に嬉しい。障がいがあっても、認知症になっても、高齢

化しても共にこの地球で生きている仲間が出会い、一緒の時を分かち合い、笑顔で共に過ごしている。こんな時を持てることが、「生きていて良かった。」と思える瞬間である。

障がいのある彼等と、これからもいろいろな所に堂々と出かけ、様々な人たちと出会い、つながり、充実した時をいっぱい持てるようにしていきたい。

東京都社会福祉協議会会長賞

東京都社会福祉協議会会長賞

エミおばあちゃんのほほえみに～畑がつなぐ地域と命のきずな

小池　常雄　58歳（東京都町田市）

1．私が生きているあいだだけ

「私が生きているあいだだけだよ…。それでもいいかい？」

…と、エミおばあちゃん（仮名）が微笑みながらいう。

この言葉が、私の週末を、農業生活に変えてしまった。

これは、地域の世話役N氏の紹介でおばあちゃんの家で面接（？）を受けたときのことば。

おばあちゃんはもう80代半ば。

耳は遠く、腰は曲がって随分小さくなった。けれど元気に、自宅の裏畑を毎日のように耕している。近くに住む私は、この畑の一部を無償でお借りする…という虫のよい話でお

邪魔している。

ここは、都心から電車で50～60分程の住宅地。40～50年ほど前は、多摩丘陵の里山に囲まれた畑が広がっていた。電鉄会社が大規模な宅地開発を行い、普通の農家だったエミおばあちゃんの家と畑は、開発地区のまん中に取り込まれた。それから50年。子供を育てながら丁寧に自分の畑を耕してきたが、もう広い面積を耕すことができなくなったという。

同席して下さった息子さんが言う。

「都市農家が抱える悩みなのですよ…。」と。

つまり、「所有地に生産緑地の指定を受け、耕作していればいいが、やめれば宅地並み課税がかかり、大きな税金が生じる。おばあちゃんが元気な時は良かったが、もう広くは耕せない。お嫁さんが畑を手伝ってきたが、それも大変な事。万が一の時は相続税が発生し、手放さなくてはならないが、それまで農地として維持しなければならない。母には元気で少しでも長生きしてほしいが…。」と、つらそうに説明してくださった。

ご子息は農業を継がず、広い所有地を活かしたテニスコート経営に忙しい。こんな状況

の中、N氏が私を紹介して下さったのだ。

おばあちゃんが若かったころ、このあたりがどんなであったかのお話を聞かせてくださるところを見ると、どうやら私は面接には通ったようだ。

そもそも私、平日には都心に1時間かけて通勤する普通のサラリーマン。職種は建築設計。農業は何の経験もない。自宅の鉢植えでゴーヤやキュウリなど夏野菜を育てている程度。結婚し、この地区に引越した新住民。新住民と言っても30年近い時間が過ぎているが、この土地で生まれ育ったわけではない。そんな私が、急に面積約３００坪の広大な畑を、ぽんとただでお借りし、休日農業を営むこととなった。

2.「つくし野ビオトーププロジェクト」って?

休日農業といっても、私は、この畑で農業をし、野菜を売って稼ごうというわけではない。地域の子供たちの環境学習のため、低農薬の畑型ビオトープを作ろうと目論んでいる。

私が代表を務める活動はすでに足かけ9年の歴史がある。ここが学区のつくし野小学校T校長（当時）が地域と保護者に声を掛け、「町田市立つくし野小学校ビオトーププロジ

エクト」という名前で、活動の歴史は始まった。

この活動には、10年前、S市で起きた小学女児による殺人事件に心を痛めたT校長の想いがある。今、子供たちは、テレビやゲームや勉強で忙しく、身の回りの環境、生命や作物に触れる経験が極端に減っている。これが、時に子供たちの問題行動を引き起こしている原因ではないか？

T先生は言う、「私は幼少期、新潟県柏崎市の近郊で育った。少年期数々の自然体験を得て、大人になった。長じた後に思うのは、この経験が今の自分を形作った。」…と。

こんなT先生の想いを基に、当初から「命」をテーマとし、「身近な命の大切さや愛おしさを学び、ひいては自分自身や他者の命の大切さを学ぶ。」…という目標で、多様な活動を継続してきた。年間活動回数は12回～15回。8年半で開催回数は延１００回を数え、参加人数は延６０００名を超えた。

当初は校庭内各所を学校ビオトープとして整備することを目指した。カブトムシを育てるカブトムシ御殿、トンボ池、メダカ池、キノコ園…巣箱設置も行った。これらの活動を次第に環境学習・教育としてとらえ、再整理。1年間の活動を通じて、ローマ時代の四大

元素説になぞらえて「水・土・火・空気」にもう一つ「命」を加えた五つのテーマに沿って活動を設定。1年間で人としての基本的な自然体験ができるよう体系化した。トンボやカブトムシ、メダカの飼育方法も指導し、直接身近な生命と触れ合うこともしている。

今小学校は、授業時間が限られ、教員は雑務に追われ、課外活動に時間を割く余裕はない。子供たちは放課後、外で遊ばなくなった。家庭は、核家族化が進み、祖父母との同居は少ない。子どもたちが育つ中で、身の回りの自然や命と触れ合う機会は大きく減少している。しかしこの地区を改めて考えると、近くに開発を逃れた里山が残り、工夫すれば自然環境に接することができる環境にある。しかし、家族単位では、踏み出せない。

当初、校庭で学校ビオトープ整備に力を注いだが、規模も限られ、人工的で小規模な生態系のビオトープは多くの世話を要求する。世話を怠れば、ここに棲む生き物たちに危機が訪れる…。次第に校内ビオトープに、限界を感じるようになっていた。

私たちの命を考える時、命を支える食べ物は全て命であり、これらの命、すなわち作物を育てること（すなわち農業）で、地球の環境やそこに関わる動植物を総合的・体験的に学べるのではないかと考えるようになった。

年間を通じた畑作経験、つまり低農薬による畑型ビオトープによって、自ら耕し、種や苗を植え、育て、慈しみ、収穫し、火をおこして調理して食べる…という活動を通じ、農や食、環境を直接的に体験し、命を体験的に学べるではないかと考えた。

私には、農業の基礎的知識が無かった。根っからの地元育ち、リタイア後自宅で都市農家を営んでおられるN氏には、技術指導をお願いし、農業資材提供や、トラクターの出動までしていただけることになった。

3．畑では事件が起きる!!

この畑で作ってきた作物は、夏から秋にかけては、サツマイモを主として、エダマメ、ラッカセイ、ヤーコン、トマト、キュウリ、ウリ、サヤインゲン、カボチャ、ワタ、ソバなど。ワタやソバは身近でありながら、ほとんどの子供たちは目にしたことが無い。

冬から春にかけては、ダイコン、コカブ、サヤエンドウ、ソラマメを育てた。

作物を育て、子供たちに収穫させるまでには面白いドラマが生まれた。

①サツマイモ畑：○○出没事件

ほぼ無農薬で育てているので、葉物野菜は虫だらけ。それでも食べる。巨大イモムシやバッタの出現に子供たちは大騒ぎする。危険な毛虫などは教えるが、基本的にあまり口出しはしない。

しかし、出たのだ！

収穫の真っ最中、イモ畑に潜んでいたネズミが飛び出して子供たちは大騒ぎ。大人が箱で捕まえたが、すぐ逃げた。都会の子供たち、ミッキーマウスは大好きなくせに、実物のネズミは見たことが無い。サツマイモの収穫時期になると、ネズミの歯跡があり、神経質な保護者には嫌がられるかと思って黙っていたのだが…。ネズミの方もいい迷惑。

②カボチャ畑：謎の巨大ウリ出現事件

カボチャはいろいろな種類があり、比較的手がかからない。西洋・日本・ペポという3系統の特徴や日本人のくらしとの関わりの歴史がおもしろく、毎年育てている。カボチャクイズというオリジナル問題で、勉強してから収穫している。

ある年、植えた記憶のない細長い巨大なウリのような実が畑のあちこちを占拠して驚いた。N氏も知らないという。

園芸店で購入したカボチャの苗の台木の部分が成長したようだ。巨大な実はユウガオらしい。ウリ科の植物は、よく接木で育てられるという。

ユウガオはカンピョウの仲間。皮は堅いが食べられることもわかった。都会のお母さんたちは、おそるおそる持ち帰って料理してみるという。料理してみれば何のことはない、味は良く染み込むしおいしかった…という報告がきた。

地方に行けば、野菜の即売所などでよく目にすることを後で知ったが、都会のスーパーにはまず登場しない。生物（つまり作物の）多様性は食べ物（食文化）の多様性にも通じる…と感じたエピソード。

4．命は命を支え、きずなとなっていく…

「命」をめぐる様々な出来事が、日々多くのニュースになる。

住宅地の中の畑で子供たちとささやかに作物を作る活動が農業と呼べるかは、いささか

心もとない。しかし、自分たちで作物を育て、収穫する喜びと経験は大きい。

毎日食べているものがどうやって作られるのか?どんな種類のどの部分をどの段階で食べているのか?スーパーでの買い物では、わからない。作物が出来るには、どういう苦労や手間がかかるのか?苦労をしても何も収穫が得られないこともあるのが、農業。収穫の喜びは、途中の苦労があってこそということもやってみて分かる。

食べることは命を頂くこと、私たちの命は命で支えられていることも、実感を伴うことで、初めて自分のものになる。この畑は、地域のきずなで満ちている。

エミおばあちゃんの微笑みは、「命が命を支え、私たちの命がきずなの中で生かされていること」を次の世代に伝えてほしい…との想いのように想え、私はまた、草取りに汗をかいている。

東京都社会福祉協議会会長賞

絆インフラ作り

大久保　淳一　50歳（東京都港区）

本当の恐怖の始まり

「癌（ガン）が、腹部、肺、そして首にまで転移しています」

「精巣腫瘍、最終ステージのⅢ-B-2です」

二度目の告知は、あまりにも呆気なかった。

朝から39度近くの熱があり、頭の奥底が唸（うな）るように痛む中、唖然として聞いた。

わずか一週間前に精巣腫瘍（＝睾丸癌）の告知を受け、急遽行われたガン摘出手術。ただし、その時言われていたことは、手術入院は一週間程度、一ヶ月後には職場復帰ができ

ると言うものだった。
だから私は、そう言う予定でいた。
しかし今、そのすべてがガラガラと音を立て崩れた。

この年（２００７年）、私は42歳。６歳と９歳の幼い子供が二人いた。外資系投資銀行に勤務し８年目で、ライフワークの１００㎞マラソンレースに本気で打ち込んでいた。仕事も、家庭も、趣味も、充実していた時に届けられた悪い知らせ。
５年生存率は49％。２人に一人が、５年以内に他界するという事実。
凍りつくと言うか、これまで感じたことの無い本当の恐怖が降りかかってきた瞬間だった。自分の運命が大きく変わったこの日、こんなことが本当にあるのかと震えた。

担当の医師から受けた説明は厳しいものだった。これから待ち受ける治療は抗がん剤全身化学療法。毒性が非常に強い薬を３本使う。
更に驚かされたのは、入院期間が３～６ヶ月。そんなに長期間会社を休んだら、解雇さ

れかねないと怯えた。私は抗癌剤治療を期に社会から切り離されることに、耐え難い不安を感じ始めた。

そして、受けた説明から自分が置かれている危い立場を理解した。

第一選択の治療は化学療法だが、その後のことは一切解らない。

抗癌剤が効くか、効かないか、それだけだ。

効けばどれだけ効果があるかが問題で、効かなければ、その時、次の選択肢を考える。

自分の生活設計が大きく変わり、僅か数日先の事しか考えられない人生。それが進行がんの患者の生活だ。

情報収集

この時私は、不安から懸命に病気と治療についての情報を集めていた。

しかし、これまで病気とは無縁の生活だった私には医療に詳しい知人などいない。ましてや、地方出身者の自分に東京での地縁も無ければ、頼れる縁者も少ない。何処にどういう病院があるのかさえ知らない。だから、情報集めは勢いインターネット検索に頼ること

になる。だが、調べれば調べる程ある事に気づく。

それは、ネット上にある情報は嫌なネガティブなものばかりだということ。

医療機関と製薬メーカーが、ホームページに載せる情報は、保守的で、あらゆる副作用を載せる。観るたびに怯え気落ちした。また、患者が書くブログは、最後に他界したと家族が書き添えてある怖いものばかり目に付く。私は、病気を乗り越え元気に社会に戻った人たちの情報が欲しかった。自分の未来と重ね合わせることで治療への希望を強く欲していた。

しかし、そんな情報はどこにもない。

失意に近い精神状態で悶々としていた。

身体的極限状態

始まった抗がん剤治療は、想像以上に厳しかった。毎日が闘いで、その日一日を乗り越えることしか考えられない。三ケ月間に及ぶ抗癌剤治療、続いて行われた二度目の大手術。この時、既に半年が経っていた。長期入院と長時間手術により身体はひどく衰弱し、あば

ら骨が鎖骨の辺りまで見えていた。そして、とどめを刺すかのような知らせが届く。抗癌剤の合併症から難病・肺線維症を発症していた。良い治療法がなく、一説には5年生存率が2割以下。毎日が命と向き合う日々だった。

患者は孤独だ。

患者の家族も孤独だ。

これから自分達の生活がどうなっていくのか、社会に無事に戻るには何をどうすれば良いのか。

自分には到底抱えきれない沢山の悩みと問題に直面するが、相談できる相手は近くにいない。

次から次へと出てくる疑問と不安は、生活そのものに関わることばかりだ。

同じ境遇にあった元患者の方から教えてほしい。経験上のアドバイスが欲しい。

治療後、元気に社会に戻った人達とコミュニケーションを取りたい。その方々の存在が患者の私を勇気づけてくれるだろうと感じた。

しかし、そんな繋がりを病床から見つけることはできなかった。

それから…

10カ月が経っていた。

献身的な医師たちの治療の下、私は奇跡的に一命を取り留める。

しかしこの頃、生涯忘れ得ぬ出来事を経験する。ヨタヨタとして満足に歩くことすらできない私が、駅前の横断歩道を渡っていた時の事だった。信号がチカチカと点滅し、横断歩道の途中で赤に変わってしまったのだ。1年前、駆けるようにマラソンを走っていた自分が、横断歩道すら渡り切れないボロボロの身体になっていた。

そのとき思った。この状態からどうすれば社会に戻られるのか、いつどうなったら仕事に復帰できるのか。しかし、相変わらず相談できる経験者は近くにいない。不安と言う真っ暗闇の中で置き去りだった。

不思議なものだ。当時、周囲の人達は皆、私に寄り添ってくれたし、最高の思いやりで接してくれた。家族も、お医者さん達も、職場の人たちも、みんな優しかった。

しかし、残念ながらこれだけは言える。

同じ境遇にあった病気経験者でなければ、あの苦悩と葛藤は解りあえない。社会に患者会は数多く存在するが、具合が悪い時、見知らぬ人たちに電話して遠方まで会いに行くなど、とてもそんな事は出来ない。

復活と始まり

長いリハビリを経て一年半後、私は職場に戻った。それから5年。周囲から驚異的な回復と称された私は、悲願の100㎞ウルトラマラソンに復帰し、制限時間内完走を果たす。多くのメディアが、社会を勇気づける話題として取り上げてくれた。そして、沢山の患者さんとその家族の方から励まされたと連絡を頂いた。

私は昨年、会社を退職し、患者さんとその家族の方々を支援する活動に軸足を移した。癌と難病から奇跡的に生かされた者として、社会に恩返しをしたいからだ。

今取り組んでいるのは、元患者さん達と現患者さんがネット上でコミュニケーションを取れる患者間社会ネットワークサービスの構築。これにより、これまで無かった新しい繋

がりと支えあいが出来ると信じている。目指すのは、患者さんとそのご家族が、経験者の方々と自由にコミュニケーションを取れるフェイスブックのようなＳＮＳ。これは7年前の闘病当時、私が強く欲した社会インフラだ。

既に英語圏には存在するが、日本には未だ無い。

昨年末、米国ボストンに飛び、同インフラに於いて先駆的な組織の会長に会い、仕組みを勉強してきた。

そして今、私は日本の文化と慣習に根付いた独自のＳＮＳを構築するために、非営利の組織を協力者たちと運営している。

年内にそのＳＮＳが出来上がる見込みだ※。

ただでさえ希薄な大都会・東京での人と人の絆。

つながりを最も欲している病気患者の方とそのご家族は、今も孤独で不安の中、病気と闘っている。

経験上の知識を持っている人達に気軽に質問出来たら、どれ程救われるだろうか。

同じ境遇にある人達と繋がり、コミュニケーションが取れたら孤独感は癒される。有益

な情報も入って来るだろうし、何よりも治療への希望が持てる。そんなことが病床からできる社会ネットワークサービスにしたい。

この国に大きなインパクトを与える絆インフラを、私は東京から作り上げたい。

（※組織とサイトは、既に立ち上がっています。https://5years.org）

運営委員会委員長賞

運営委員会委員長賞

PARTY！

内山　美津子　36歳（東京都八丈町）

＜僕のSOSが君に届かない・・・・＞

THE BLUE HEARTSの曲〝パーティー〟をみんなで歌いながら、その歌詞を目で追ううちに、ほこちゃんがこの曲を選んだ理由が、沁みてくる気がする。ここは島にひとつしかないライブハウス。ステージの上にいるのは、《精神障害者》と呼ばれてしまう人たちと、その《関係者》たち。こんなふうにいうと、なんだか特殊な境遇の人だけの集まりに思える。でも、パーティーの参加条件は、〝誰でも〟。

かほりちゃんの書いたチラシの文字は、ふわふわしてカラフルでやさしい。

＜生きていくことに苦労が多くなりがちな精神しょうがいを抱える当事者と彼（彼女）

らに寄り集まってきた人々とで〉楽しい時間をすごすためにパーティーは準備される。

去年はおにぎりだったけど、今年はハンバーガーをつくる。パテは牛肉１００パーセントで、ミネストローネと、チーズケーキも。入場料は去年みたいに５００円で食事つきがいいのか、それとも食券制にしようか。毎月一度の《うれＰ家》（うれぴーや）の場で、みんながすこしずつ意見を出し合って計画していく。お化粧が得意なある女性はメイクコーナーを担当して、ひとり１００円でお客様に派手派手メイクを提供する。いろいろ持ち寄ったものを並べてのフリーマーケットも楽しい。販売用の手作りジャムのために、半年以上も前にみんなで山に行って、島ではあびの実と呼ばれる木苺をどっさり摘んできて、煮て、ビンに詰めて……。

うれＰ家という定期的な集会がいつからどうやって始まったのか私は詳しくないけれど、その場所がみんなにとってどんなところなのか、すごく知りたい。みんなが楽しそうにしてるから。

ほこちゃんは、「みんなと一緒に遊びたいだけなんだよね」という。だから毎月自分の

家を集まりの場として開放している。遊びの中で発揮されるそれぞれの力。普段、作業所やグループホームでなんだか退屈そうにしているひとが、いきいきと発言したりする。私も、おもしろいから、行けるときは遊びに行く。

ほこちゃんは島のヘルパーさんをしている。《高齢者》や身体・知的・精神の《障害者》や、いろんな手助けが必要な人のところに、《生活支援》をしに行く。でもいったいどうして、行政が使う言葉は、なんとなくひとを傷つけるんだろう。私は何に傷つくんだろう?

カラオケは、機材を借りて、何の歌をだれがどの順にうたうかあらかじめ考えてある。みんなの歌声をきくのは本当に楽しみ。ひとりひとりの声の中に、人生の味わいがたっぷり詰まっている。絶唱というべき「帰ってこいよ」には〝魂を鷲掴みにされる〟し、迫力の山本リンダには拍手喝采が送られる。字なんか読めなくたっていい。歌詞だって違ってもいい。いろんなきもちが声になって響くと、だれかのこころをふるわせる。「風の谷のナウシカ」を聴いて泣くのははじめてだけど、それは悲しいからじゃなくって、なんだか自分が救われる気がしてそのことに私は驚く。

会場を借りるのにはお金がかかるから、赤字にならないようにみんなが頭をひねる。お客さんをたくさん呼ばないといけない。チケットは何枚用意すればいいかな？できるだけごみは少なくしたいね。みんなで決めて、みんなでやっていく。できることや役割は人それぞれだから、違っていいしちょっとずつでいい。長い時間とたくさんのちからをその日のためにかけていく。

人口が８０００人に満たないこの島では、ひとりの人間が生活の場面によってくるくる役を変える様子がよくわかる。狭い土地、人と人の距離が近い。店員としてお客様に接した後で、その相手のやっているお店に客として行く。水道のことで問い合わせると、担当者が近所のお兄さんだったりする。パーティーの会場であるこのライブハウスのオーナーだって、私が以前勤めていた仕事先の上司だ。小さな島で暮らすそれぞれには、さまざまな役目や立場があるけれど、いったい自分はいま何を担っているのだろう。

私はグループホームの世話人としてこの島に戻ってきて、作業所のスタッフもして、でも今はそれもやめて、精神保健福祉とは関係のない仕事についている。では、このパーテ

ィーに人々を結び付けている《精神障害》ということばが自分にとって何かというと、私はその《当事者》としてここにいる。去年まで転職を繰り返しつつ何年も精神科に通い、毎日おそろしい思いをしてどうにか暮らしていたことと、今、通院もせずに元気で暮らしていることの間には、ただの偶然が何枚か挟まっているだけで、それらの一枚でも破れたら私はまたすぐに《患者》になる。ほんとうはそれは誰だって同じで、健康な生活をしていても、いつ、《障害者》になるかわからない。

シンプルに、気楽に生活したいと願っても、現代社会には問題が山積みで、精神科の患者数は増え続けている。息苦しい時代を生きているひとりとして、私はこの場に連なりたい。福祉、とか地域、とか、大きな言葉を使うと、自分の立ち位置はわからなくなってしまう。

集会は、最初は、うれしい家と呼ばれていたのに今はうれP家という。「し」という文字を使うと死んでしまうからよくないという意見が採用されたから。「し」という文字を使わない方がいい世界に生きている苦しさを、私は想像する。《精神障害》は、《身体》や《知

的》と比べると、わかりにくいとときどき言われる。そのことは、あまり大きな声では語られないし、隠されたり、目をそらされたり、嘲られたり、眉をひそめられたりする。チラシには《生きていくことに苦労が多くなりがちな精神しょうがい》とあるけれど、それはどういうことなのか。

聞こえないはずの誰かの声がどこからか聞こえてくる恐ろしさを、私は知っているから、その生きづらさの正体をじっくりと見極めたいと思う。何が私たちの苦しみか。なぜそれが与えられるのか。

これからパーティーが始まるというのに、メインのハンバーガー用のパンが届かない。100個のバンズのことを、パン屋さんはうっかり忘れている。島中の商店に配達された食パンが急遽回収されて、ハンバーガーではなくサンドイッチのためとなった牛肉のいい匂いがし始める。みんなの書や絵が貼られた会場の目立つところに、ほこちゃんの書いた『希望ちゃん』がある。「希望、とただ言うとなんだか掴めない遠いもののように思われるけれど、〝ちゃん〟をつけると親しみがわいてそばにいてくれるかんじがする」とほこち

ゃんは言う。様々な背景をもつ人々が会場の椅子にすわり、私たちはステージに上がってその歌を歌いだす。

＜本当は大きな声で きいてほしいのに ためいきだとか 舌打ちだとか ひとりごとの中に かくしてる＞

自分の人生を最期まで生きなければならないその一点において私たちはどこまでも等しく、他者の荷物がどれほどの重さなのか正しく測ることはできない。肩を並べてみる。

にぎやかなパーティーが始まる。

＊THE BLUE HEARTS 甲本ヒロト作詞作曲〝パーティー〟より、歌詞の一部を引用しました

運営委員会委員長賞

僕のクラスメイト

勝見　恭子　32歳（東京都目黒区）

「こんにちは～。学校で分からない問題があったから教えて～。」

そんな子ども達の声が聞きたくて、私は「めだかの学校」を始めました。

「めだかの学校」は、２０１０年に地域の子ども達だれもが無料で参加できる学習支援教室として、東京都目黒区に第一校を開校して、現在5年目を迎えました。子どもが自分の意志だけで参加でき、学習の量や内容も子ども自身が決めます。教室の運営も子ども達が相談して行い、「勉強する部屋」と「遊ぶ部屋」を分けたり、おやつの時間を作ったり、クリスマス会のようなイベント行ったり、地域の大人がサポート役として関わりながら活動しています。

「めだかの学校」の開校日である毎週土曜日の午前中には、平均して10人前後の子ども達と10人前後のスタッフが集まります。子ども達の学年は幼稚園～中学生まで様々で、学校もバラバラ、過ごし方もそれぞれ異なります。受験を目指して一生懸命勉強している子、真っ白なコピー用紙から瞬く間にバスや電車を作り上げる子、一通り勉強し後はスタッフと遊ぶ子など、子ども達は自分で目標を定め、自分で時間の使い方を決めています。中には、みんなが勉強している時に誰かの勉強の邪魔をしたり、他の人のお菓子を黙って食べたりしてしまう子が居て困った事もありましたが、そんなときには子ども会議を開いてみんなで相談し、その度にその子を排除するのではなく「なんかいい方法は無いかな」と子ども達で解決策を考えている姿に、スタッフは感動させられてきました。

私が「めだかの学校」を始めたのは、私が6人兄弟の長女で、小学生の頃に親に「塾に行きたい」と言えない「イイコ」だったことが原体験となっています。当時、幼い妹や弟の世話や家の手伝いで友達とも遊べず、次第に学校での居場所も減り、「何で生きている

んだろう」と思い悩んでいました。しかし、「お姉ちゃんなんだからイイコにしなさい」と言われて育った私には、弱音を吐ける場所がなく、「イイコでいなければ家に居れない」、「学校でもイイコで居ないと親に連絡される」、「電話相談に連絡するような子はイイコじゃない」などと、イイコの呪縛に苦しんでいました。

そんな当時の私の居場所は図書館でした。図書館はお金がかからず、また親にも胸を張って出かけられる場所でした。だから、「そんな図書館のような場所で、子ども達が本音を話せる居場所を作りたい！」、そう思って始めたのが「めだかの学校」です。学習支援を手段として、子ども達が自分らしく輝く事を本気で応援する、そんな子ども達の居場所となることを目指しています。

3年前、そんな子ども達の教室に、社会人の方から連絡がありました。

「突然のメール失礼いたします。

私は現在、生活保護を受けております。吉崎（仮名）と申します。28才です。

この度もう一度数学を勉強したく、ワーカーさんに相談いたしました所、めだかの学校を紹介していただきました。

小中学生のお子様が中心とうかがってはおりますが、私にはご指導下さる人間がおりません。お子様方には十分な配慮を心がけようと思っております。

どうかご指導を賜りたく存じます。どうぞよろしくお願い申し上げます。」

私は当時、吉崎さんを受け入れるべきか大変迷い、仲間に相談したのを覚えています。「めだかの学校」は子ども達の教室です。教室の運営も子ども達が話し合いながら進め始めた頃でした。その雰囲気を壊したくないという思いと、吉崎さんの思いに応えたいという思い。そのどちらも捨てきれず、私達スタッフは、判断を子ども達に任せる事にしました。一度吉崎さんに「めだかの学校」にお越しいただき、子ども達の雰囲気を見て決めようと思ったのです。

吉崎さんが初めて「めだかの学校」にいらした時、「小・中学校の頃に不登校だったので、

今、警察官を目指して勉強するために、もう一度小学校の算数からやり直したい」と話してくれました。そして、その日から、小中学生の中に混ざり、算数を一生懸命勉強されていました。そんな様子を見てか、子ども達が、子どもだけで分け合うおやつを、吉崎さんの分も取り分けてくれたのです。私達スタッフは自然とみんなが笑顔になり、吉崎さんはその日から「めだかの学校」の大切な参加者になりました。

【小・中学生に混ざり、大人が一人、小学校の算数を勉強する】、とても覚悟が居ることだと思います。それでも吉崎さんは毎週「めだかの学校」に通ってくれました。子供達の前でも恥じることなく、小学校3年生のドリルにコツコツと励み、私達に熱心に質問されていました。

吉崎さんはとても真面目な方でした。子供達とスタッフでワイワイ騒いでいる中でも、ひとり黙々と勉強されていました。そして、とても優しい方で、子どもが一人ポツンと勉強していると、その子に話しかけてくれていたりもしました。いつしか、吉崎さんは子供

達から「先輩！」と呼ばれ、すっかり「めだかの学校」にも馴染んでくれたようでした。

そんな吉崎さんが、珍しく感情的なメールを送ってくれた事があります。

その日は、ある事件があった日でした。1人のボランティアスタッフが、小学校6年生の子供を不適当な発言で傷つけ、泣かせてしまったのでした。

そのスタッフは、その日だけではなく何度も子ども達の心を傷つける行動をしていた事もあり、私はそのスタッフと話し合い、辞めていただくことになってしまいました。

吉崎さんは、そんな様子を見ながら、色々考えていてくれたのでしょう。

もしかすると、場所になじめなかったスタッフに自分を重ねていたところもあったのかもしれません。

そんな吉崎さんから頂いたメールには、

「あのスタッフさんは熱心なところもあったので、辞められるのは残念です。
でも、僕のクラスメイトを泣かせた罪は重いです。」
と書かれていました。

【僕のクラスメイト】

私はこの言葉を何度も何度も噛みしめました。小中学校、不登校だった吉崎さん。
当初は、子供たちやスタッフの輪の中にも積極的には入ってこなかった吉崎さん。
でも今、吉崎さんにとって、ここは学校で、子ども達はクラスメイトなんです。

私は、胸に熱いものが込み上げてくるのを感じながら、改めて決意しました。
「めだかの学校」は、絶対に続けていかなければいけない。だから、組織化してチームとしての土台をしっかり作り、ゆくゆくは「めだかの学校」を地域にたくさん増やしていきたい！

それまで任意団体として趣味ベースで続けていた「めだかの学校」と、本気で向き合っていこうと覚悟ができた瞬間でした。

今、私達は改めて目指しています。「めだかの学校」が、子ども達の意志を応援することで、子ども達がより自分らしく輝けるようになることを。子ども達の心が不安定になった時に、そっと寄り添える地域の身近な居場所となることを。

２０１４年９月２日。「めだかの学校」は、新たにＮＰＯ法人としての一歩を踏み出しました。

これからも私達は、たくさんの人を心から応援するために、試行錯誤しながら、前へ進み続けます。迷った時は、「僕のクラスメイト」、きっとこの言葉が道を照らしてくれると信じています！

運営委員会委員長賞

落人味噌出来ました

市川　富茂　56歳（東京都品川区）

土曜の午後、昼寝をしていた私は妻に起こされた。妻の目が笑っている。

「節子おばさんからよ。早く出て。」どうせ親父が何かしたんだろう、と思いながら電話に出ると、案の定である。

「富ちゃん?よっちゃん（父）がえらいことしてるから、はあくきて！」

父の集落に行くには、私の街西大井から車で二時間以上も掛かる。既に八戸しかない集落で、皆親戚であり、五十六才の私が永遠に「若い衆」の集落である。

来てみると親父が母屋の入り口に作業小屋を作っている。八十六才の父であるが、こういうことは早くて上手い。暇な叔父達が手伝っている。

私「なにょしてるでえ。ここは玄関じゃねえだけ?」
叔父①「おう富ちゃん、止めとうさ。どうしても此所を味噌蔵にするってよ。」
親父「帰れ帰れ、旨いもんは小人数どお。」意味不明。

委細はこうだ。父の集落は谷間で耕作面積も少なく貧しいことから、唐辛子と屑野菜を切り込んだ味噌がいつもオカズにあった。家により若干中身が違うのであるが、大差はない。豊かな時期は挽肉が入っている程度である。このとうがらし味噌が食の専門家に大層褒められたらしい。地域の食文化を発掘するとかで、農振事務所の職員が父の作った味噌を持っていき、試食してもらったところ、「大地の香りが素晴らしい。味に文化がある。」とのことで、早速都内で試販するように言われたらしい。
親父「デパートだっちゅうぞ。幾らにしっか?見物も兼ねて皆で行くだあ。」
私「行くはいいけんど、物を売るっちゅうこんは大変なこんだよ。値段なんか気にしないで配ってこおし。」
無為に過ごしていた父達に刺激があるのは良いことと思い、好きにさせることにした。

母屋の改造も費用が掛かっている訳ではないので勝手にやればよい。母に先立たれた父を止めることの出来る者はこの世にはいない。

せめて味噌のパックにシールだけでも付けようと「落人部落秘伝 とうがらし味噌」とロゴマークを考案し、成分表示も農振事務所の指導に従って添付した。

特産販売会の期日は土日だという。節子バアからまた電話である。

「百個も作ったさあ。えらい荷物だから富ちゃんの車で運んでくりょお。乗ってくのは六人さ。あたし達は銀座とスカイツリーへ行くから、デパートは頼むじゃんね。泊まりはホテルがいいわ。旅館は田舎臭いけん。」

年寄りの修学旅行である。なんで私がと思ったが、「これも親孝行よ。」と妻に背中を押されて出発した。

会場に入って私は後悔した。銀座の一流デパートの特設会場で、周りは洗練された開発品ばかりである。庭でむしってきた胡瓜に味噌を付けて試食してもらう、などという原始

的なことが受けるはずがない。しかも農振事務所の担当の方には、「野良着、前掛けで来て下さい。」と言われていた。今時野良着なんか誰も着ない。

自暴自棄の私は販売を諦め、持ってきた味噌と胡瓜を配ってしまい、親父達の観光に合流することにした。

都会は不思議な所である。売る気のないこんな姿が奇異に見えたのか、多くのお客様が私の前に立ち止まり、胡瓜を食べて味噌の説明を聞いてくれ、百グラム百円で買ってくれる。更に「百円はいけません。三百円になさい。」とアドバイスまで下さる。用意した百個の味噌は午前中に完売してしまった。開催者である国の方々から、「明日用の商品を作ってくるように」と言われても、親父達はスカイツリーを遊覧中でなす術はない。

帰って来てからの彼らの高揚感は尋常ではなかった。親父は「地域の食文化が評価される時代がきた。我々は文化の継承者である。」などと訛らず言うようになった。対策の寄り合いは白熱した。

叔父①「こんなに売れるなら本物だな。これはちゃんとしらざあ。」
親父「俺たちしか作れんようにするが大事だな。農振事務所の先生に相談してくらあ。ほれから、まっといろいろな味をつくるじゃんか。おまんとこの生姜入りはうまいど。」
叔父②「金が掛かるじゃんね。俺が補助金を探してくらあ。」
叔父③「生姜入りは時季が限られるからなあ。肉入りなら節子バアが得意どお。」
この人達はどういう思考回路を持っているのか。「旦那の一気働き鬼も敵わぬ。」というが、凄まじい推進力である。結局、行政の支援を頂いて、生産合同会社「日陰ホールディングス」を設立してしまい、商標「日陰の落人味噌」を登録してしまった。私は端でただ見ており、驚くだけだった。「ホールディングス?」
代表は元陸軍中尉、最年長九十二才の正治爺、親父は専務取締役、その他全員が執行役員という会社である。「社員がいないじゃん。」と私。
正治爺「おめえだ。金のこたあ任せた。主計だ。エリートだぞ。」
こんな会社ではあるが、六次産業化が注目される中で、完全に地域の農業者だけで設立

されたことが話題となり、様々な取材を受けることになった。

正治爺「ここが宣撫活動の肝だ。節子バアを前面に出して、やたら元気な田舎の年寄りを印象付けするのだ。俺達は味噌で飯を食って、酒飲んで騒いでりゃあいい。」

精鋭第五師団ジャワ島宣撫工作班の経歴は伊達ではなかった。「典型的な限界集落で楽しく酒食する老人達。明るく世話をし、落人味噌を造る陽気な農村女性。落人味噌さえあれば日々は幸せ。」

問い合わせが殺到し、近隣スーパーだけでなく、都内の百貨店にも常設で置いてもらえるようになったのである。

親父が振り返って言う。「なんでも良かっとお。金なんどうでもいい。こんな山ん中で世間と離れて暮らしていりゃあ、みんな石仏で。まだ社会に俺達の居場所があるっつうことが大事なんだ。みんなを見てみろ、十は若返ったら。おまんにゃ苦労掛けるけんど、いま暫く付き合ってくりょお。」

親父、日陰の衆、勉強になりました。年の功には敵わない。私も何時かは皆さんのような年寄りに成りたい。そしてその時には、「若い衆」に目一杯迷惑を掛けてやりたいと思うのである。

運営委員会委員長賞

つながり

菊地　正行　49歳（東京都西東京市）

「帰れ。もう来るな！」「はい、はい、帰ります。ちゃんとお薬飲んでくださいね。じゃあ、行きましょうか。」古いアパートの赤錆の目立つ外階段を下り、しばらく歩いたところでケアマネージャーが申し訳なさそうに話しかけてきました。「すみません。菊地さんまで嫌な思いさせちゃって・・」「大丈夫ですよ、私もその後どんな生活を送っているか気になっていましたから。訪問看護のサービスが入ったおかげで薬の管理はできているし、大きな声も出るくらい元気になってたんで安心しました。」「ありがとうございます。でもなんで急に怒り出したんですかね？」「家族の話題になったら急に怒り出しましたからね。あまり話したくないんじゃないですか。でも入院することになったら保証人が必要になりますし、手術することになったら同意書だって必要ですからね。家族の連絡先は聞いてい

た方がいいですよ。時間をかけて少しずつ聞いていくしかないかもしれないですけどね。」私は高齢者の介護に関する相談センターの職員として働いています。高齢者本人やその家族、民生委員等、様々な人から相談を受けます。今日はケアマネージャーから「気難しくすぐに怒鳴る高齢者がいる。一緒に訪問してほしい」と依頼があり同行しました。ケアマネージャーと別れセンターに戻ろうとしていた時でした。「菊地さん」大きな声は村田さんでした。村田さんは団地の自治会長です。エレベーターの無い、その団地には一人で、あるいは夫婦だけで生活している高齢者が多く住んでいます。「3号棟に住んでいる方から相談があってね。近くのお宅から異臭がするからどうにかしてほしいってことなんだよ。ちょっと見てもらえないかね?」「いいですよ、一緒に行きましょう。」玄関の前には大きなハエが飛び、少し開いていた台所の窓からはモノが腐った臭いがしていました。「横橋さん、自治会の村田です。」しばらくしてドアが開き、中から腰が曲がった男性が出てきました。衣服は食べこぼしで汚れ、強い尿臭がします。部屋にはスーパーのビニール袋に入ったゴミ、食べたままのカップめんの容器、衣類、新聞雑誌が床一面に広がっています。「横橋さん、こんにちは。私、菊地と言います。近くの相談センターの職員です。この地

区を担当していて、一人で生活している方の自宅を訪問しています。ちょっとだけお話うかがってもいいですか?」横橋さんはご長男と暮らしていましたが事故で亡くなり、その後は一人で生活してきたそうです。腰痛に加え、最近では膝が痛み、しゃがむことが出来なくなりました。右手に杖、左手で手すりにつかまり階段の上り下りは出来ていました。通院帰りにスーパーで食べる物をまとめて買って配達してもらっていました。しかし主な食事は出来合いの総菜や弁当、カップめんです。生活していればゴミが出ます。ゴミを持つと片手がふさがり杖や手すりが持てません。結果、1階のゴミ収集場まで行くことが出来ず「いつか捨てよう」と思っていたらゴミが溜まっていったそうです。このままの不衛生な状態で生活することは望ましいとは思えません。生活を立て直す前に部屋の整理を手伝ってくれる人がいるか横橋さんに聞いてみました。しばたく沈黙が続いたあと、ゴミの中の敷きっぱなしの布団の下から使い込まれた携帯電話を出してきました。「ユキ」と登録してある電話番号に連絡したところ若い女性の声がしました。声の主は事故で亡くなったご長男の子、横橋さんの孫のユキさんでした。ご長男の離婚によりユキさんと会うことが少なくなりましたが、それでも連絡を取り合い、食事にも出かけていたそうです。本人

や部屋の様子を報告したところ3日後に会うことになりました。約束の日、団地の近くにきれいに磨かれた大きな黒い車が停まっていました。普段は見かけることの無い車です。「横橋さん、こんにちは」横橋さんの横に小柄な若い女性が立っていました。ユキさんです。そしてもう一人、黒いTシャツにジーパン、１８０㎝はありそうな男性が立っていました。さっき見かけた車の持ち主です。ただ立っているだけですがものすごい威圧感を感じました。簡単なあいさつを済ませ全員で部屋の整理に取り掛かりました。仕事柄、ゴミの処分はよくありますが時間がかかる割にはなかなか進みません。コードが無く、使えなくなったコタツを外の廊下に出します。これ以上は薄くならないほどペラペラになった布団をベランダに干します。大きなモノを片付けてからゴミの処分を行うと部屋の様子が変わり、前に進んだ気持ちになります。それでもやはりゴミの処分は時間がかかります。中には思い出の品や大切な書類もあり、すべてをまとめていっぺんに捨てるわけにはいきません。皆、無言で手を動かします。買ったまま開封していない肌着やいつ届いたか分からない郵便物、飲んでいない薬の袋など、必要そうなモノを一か所に集めます。ユキさんが横橋さんに確認し必要か否かを分別していきます。床の木目が見え始め、部屋が少しずつ片

付いていきます。白い軍手が黒く汚れ、首にかけたタオルが汗で重くなってきます。風を通すために開けっ放しのドアから村田自治会長が顔を出し「飲んでね」とお茶の差し入れをしてくれました。休憩のときに昔の話になりました。ユキさんから連絡をもらって来たという大柄な男性は高橋さん、亡くなったご長男の幼馴染でした。以前団地の近くに住んでいて兄弟のように仲が良かったそうです。「昔、この家に良く遊びに来ていました。両親が共働きで夜遅かったから夕飯食べさせてもらったり風呂に入れてもらったりして、おじさんにはいろいろと世話になったんです。」横橋さんも話を嬉しそうに聞いていました。朝から初めて夕方に何とか終了、一日がかりでしたがゴミの分別、部屋の整理をすることが出来ました。あとは決まった曜日にまとめたゴミを出すだけです。問題はだれが収集所までゴミを持っていくかです。事前にゴミを出すわけにはいきません。「あらー、随分きれいになって」ドアを見るとお隣の方が立っていました。「よかったわね、横橋さん」「すみません、ゴミは片付いたんですが曜日ごとに収集所に運べなくて・・。お手伝い、してもらえませんか?」ダメでもともと、お願いしてみました。「あら、いいわよ。そんなこと。ちょっと待っててね。お父さんよんでくるから。お父さん?」お隣の夫婦が同じ階に

住む元気な女性にも声を掛けてくれました。曜日ごとに出すゴミが違うため交代で手伝ってくれることになりました。日が落ちてくうす暗くなったところには、ゴミでいっぱいだった床が見え、なんとか生活できるようになりました。「おじいちゃん、またね」「おじさん、さようなら。菊地さん、お疲れさまでした。」一週間後、様子を見に訪問したところゴミの山はきれいに片づけられていました。団地近くを通ると黒い車が時々停まっています。高橋さんがその後も来てくれているようです。村田自治会長からも「お隣の方がゴミ出しの手伝いをしてくれている」と報告がありました。一人暮らしの高齢者がゴミを通じて人とのつながりを持つことが出来ました。些細なことから人はつながれることを実感した出来事でした。

運営委員会委員長賞

きずな

田口　賢持　50歳（埼玉県新座市）

私はマンションの管理の仕事をしてきて、居住者間の「つながり」が希薄化することで発生する様々な問題を見てきました。なかでも、孤独死の現場に立ち会った時の事が衝撃的だったので、そのことも含めマンション居住者の「きずな」についてお話ししたいと思います。8月の暑い日、マンションの管理人から電話がありました。○○○号室から異臭がしていて近隣の居住者から苦情が出ています、何度も訪ねてますがずっと留守で困っています、どうしたらいいのか分からないので来てもらえませんかという内容です。夏休みで旅行に出かけているのではないかと思ったのですが、管理人は高齢者の1人住まいで最近は全く見かけていない、新聞も溜まっていて郵便ポストもいっぱいなので何かあったんですよと言ってきました。どうやら最悪の事態を想定して電話をかけてきたようで、管理

人の口調からただ事ではない空気を感じたので、私は直ぐに緊急連絡先になっていた親戚の方へ電話をして心当たりを探してもらい、マンションへ向かう事にしました。マンションに着くとエントランスには多くの居住者が居て、ちょっとした騒ぎになっていました、管理人が居住者達に聞いて回っていた事が噂になって人が集まって来たようです。問題の部屋に行ってみると、近所の居住者が出てきて色々と話を聞かせてくれました、どうやらご近所付き合いが全く居ない人だったようで、両隣の居住者でも玄関前で会った時に会釈をする程度で会話をしたことがないと言っていました、最近はまったく見かけていないので留守だと思っていたが、数日前から部屋の前で何か臭うので管理人に話したようです。現場を調べると廊下側の部屋の通気口から臭いが漏れていたのですが、生ゴミなどとは明らかに違いなんとも表現しづらい強い臭気のものでした。この時に、いやな予感がしたので、親戚の方に連絡を取り最悪の事態もありえるので警察官立会いのもとで部屋の確認をしたい旨を伝え、鍵を壊す許可を貰いました。警察官とカギ業者が先に到着したので、親戚の方を待たずに鍵を壊して警官2人だけが中にはいり遺体を発見したのですが、しばらくすると私と管理人が呼ばれ本人確認をする事になったのです。寝室で亡くなられていた

のですが、数週間は経過していると思われる故人の姿は痛ましいもので私は直視することができない程でした。暫くして親戚の方が到着するのですが、その時にはマンションの前に数台のパトカーが止まり、部屋も閉鎖されてましたので状況は直ぐに理解ができたと思います。私は親戚の方に声をかけ状態が悪いことなどを話したのですが、本人の強い希望があったので警察官に頼んで部屋の中に入れてもらいました、私は外で待っていたのですが、親戚の方が何度もゴメンネと叫んでいる声が外まで聞こえてきてきた時は周りにいたご近所の方達と手を合わせていました。後から聞いた話では、故人には持病があって通院をしていたので親戚の方も以前から心配していたそうです、しかし、遠いのでたまに様子見に来る程度で最近は連絡すらしていなかったようで、その事をとても後悔していました。ご近所の人達も「具合が悪かったのにだれにも頼れなかったのではないか、病院へ連れて行く人がいたら助かったのではないか」など想像して声をかけてあげなかった事を悔やんでいたようです。管理会社に委託をしているマンションでは居住者同士が助け合ってなにかをする機会もないので「きっかけ」が少ないのではないか、小学生などいる家庭では集団登校や学校行事の役割分担があって、子どもつながりでの知り合いも出来ますが、高齢

者や独身などは他の居住者との接点が全くないので、孤立してしまうことが多いのではないか、私はこのままではいけない、管理会社がやらなければこの様な不幸が今後も続くのではないかと思い、マンション居住者の「きずな」について真剣に考えるようになりました。当時の私は管理会社を運営する立場でしたので、はじめにテントやテーブル、椅子、コンロなどの機材を会社で購入して管理組合に無償で貸し出すサービスを始めたのです。バーベキューや夏祭りなど居住者の集いを企画して管理組合をサポートすれば喜んでもらえると思ったのですが、これがなかなか大変な事で賛同する管理組合はほんの一部で、多くの管理組合さんでは理事会メンバーがめんどうだと反対されてしまう。不幸な出来事があった事や災害時などで助け合う為にも、居住者同士の「きずな」が必要であることを説明して、半ば強引に社員を派遣してイベントをした事もあって管理会社が主催しているような時もありました。当初は苦労もあったのですが、継続していると毎年やりたいと希望する管理組合が現れたり、マンション居住者のコミュニティー形成に共感してくれた有志によって実行委員が組織されたり、主婦を中心に全戸を回る声かけをしてくれたり、その事がきっかけで独身や高齢者の方とマンション内で会ったときに積極的に話しかけたりと地道

な活動で、参加者を増やした管理組合さんもあって、考えすぎるより気軽に声を掛けてみることが大切だと言うことを教えてもらいました。居住者の中には、人とのつながりを面倒だと思う方もいますが、孤立したいと思っているわけではないと思います。また仕事のつながりやお付き合いを優先して、ご近所づきあいまでする時間的な余裕がなかったりと様々な理由が考えられますが、深いお付き合いを想像するのではなく、たまに会った時に立ち話しが出来る程度の付き合いでも十分なのではないかと、同じマンションの住人として何かあった時に助け合いの精神があればそれでよいのではないでしょうか。何れ仕事をリタイヤされると仕事上の付き合いがあった方とは疎遠になるものです、だからと言って、長年挨拶を交わすことも無かったマンションのご近所さんとお付き合いをする事も出来ずに孤立してしまったりします。マンションが仮住まい的に考えられていた時期もありますが、今では永住志向が高まっています、老後の事まで視野にいれて今から生活するのも大変ですが、長く住むのであればご近所との良好な関係を築いておく事は大切なことだと思います、しかし、きっかけがなかったり、お互いに遠慮があって声をかけることが出来ないのであれば、その手助けをする第三者が必要なのではないかと私は思っています。今

の人たちが近所づきあいを避けていて、マンション居住者の「きづな」が無いというより、共稼ぎの家庭が増えて留守がちだったり、居住者が協力して何かをしなければならない状況がなくなったり、マンション内でのつながりが出来難い時代になったということだと思っています。円滑な組合の運営を行う為には、居住者同士の適度なお付き合いが必要で、理事会が中心となって「きづな」づくりをすれば、マンション内で発生するトラブルも少なくなると信じています。

運営委員会委員長賞

夢見るように深く植えよ「植樹プロジェクト」～地域のきずなと風景を生み出す公園整備活動～

大垣内　弘美　34歳（東京都世田谷区）

1）はじまりは、地域住民のちいさなつぶやきから

「あの東京外郭環状道路の開発がいよいよ進むようになって、地域の風景が壊れていく。壊れていく風景ばかりを見ながら育つ子ども達が可哀想。

…だからこそ、子ども達と共に育っていく風景を贈りたい」

そんな小さなつぶやきと共にはじまった公園内の植樹プロジェクト。植樹自体はそう珍しいことではないが、その背景には、母達の願いがつまっている。そして、それをおおらかに支えようとする町会の存在があった。

これは、実際に私達が活動拠点とする次大夫堀公園「東側児童遊園」での体験談だ。

私達、ＮＰＯ法人プレーパークせたがやは、地域住民主役のコミュニティづくりを目的として、「支えあいの輪を育む！遊びの出前〝プレーカー〟」という活動を月１回行っている。地域からの要望があり、子育て支援の一環として５年前よりこの公園で活動している。

2)地域の課題

この次大夫堀公園周辺では、東京外郭環状道路の開通工事が行われている。首都圏の〝慢性的な交通渋滞の緩和と環境の改善策〟として工事が進んでいる。一端は凍結されたものの、東京オリンピックの開催が決まったことにより、開発が急がれている。その為、近年、公園近隣では立退く家が続出し、土のみの寒々とした風景となっている。

昔からこの地域は、世田谷区内でも稀にみる牧歌的な風景が残っており、畑もあれば、湧き水さえもある。世田谷のみどりの生命線と呼ばれる国分寺崖線からの湧き水はまさに次大夫堀公園のお隣をのどかな風情で流れている野川に注ぐ。

ところが、道路開発による住宅の立退きにより、住民の住むエリアが分断される。つまり、地域の財産ともいえる〝コミュニティ〟が分断され、豊かな希少緑地の消失、おまけに地下水脈の切断…、と巨大な破壊がはじまっているのだ。

3）耕す地域コミュニティ〝野良人（のらびと）の絆〟

その問題の渦中にあっても、その場で地道に暮らし、地域の絆を繋ごうとしている人達が存在する。それが、上部町会の皆さんだ。上部町会は、〝自分の住む地域は、1人1人が力を出しあい、自分たちの力で作っていこう〟とする気概が強い。住民自治の素晴らしいあり方を私に教えてくれた。

上部町会の活動ベースは、次大夫堀公園〝東側児童遊園〟の公園整備活動だ。みんなの憩いの場である公園を手入れする、言わば、土を通じた〝耕す地域コミュニティ〟に力を入れている。私も、1ヶ月に1度、この場所で遊び場を開園させて頂いている感謝の気持ちを込めて、年4回の公園整備活動には毎回顔をだす。皆さんと共に草むしりや工事残土のガラをとりのぞく…、等の作業で汗を流す。その時間は、一見、地味で地道な作業の連

続だが、とても有意義な時間である。なんだかとっても楽しいのだ。「なんでこんなに楽しいんだろう?」と自問自答、そして、周囲の人を見回してわかったこと。皆、この機会を心から楽しんでいる様子。強制されていやいや作業している人はいない。他愛無いおしゃべりをしながら、手を動かし、すっかり伸びきってしまった手強い雑草を取り除く。最初は途方もなく長い道のりに思えた草むしりも、40人前後の人々が集い手を動かすと終わりが見えてくる。ささやかで味わい深い達成感があるのだ。

時には小さなハプニングもある。雑草を取り除いた花壇の土を掘り返していた時のこと。なんと亀の卵が5つもでてきた!!しかも、その卵からたった今生まれてくる命があったのだ。私は子ども達に「亀が卵から生まれてくるよ〜!」と一声叫ぶと、子ども達のみならずその場に居合わせた人々がわらわらと集まり、固唾を呑んでかめの赤ちゃんが生まれてくるのを見守った。皆、目を輝かせ、その場にいる…、というなんとも愉快なハプニング。そこには言葉以上に体験を通じての一体感があった。

4)夢見るように深く植えよ〜現実をあきらめない・嘆かない人たちの想い

〝耕す地域コミュニティ〟のメンバーは、上部町会だけではない。〝自主保育グループ・わくわく〟や多摩川の豊かな自然環境を活かした冒険遊び場を運営する〝砧・多摩川あそび村〟も含まれる。

その自主保育わくわくの子ども達が卒業を控えた２０１４年１月。前述のつぶやき、「大きな重機で愛着あるものが次々と壊されていく今だからこそ、植樹をすることで無くなることのない故郷のような風景を創りたい！」という相談が私の元に舞い込んできた。こういった相談事はまず町会に相談するのが一番だ！と感じ、私から上部町会の荒川さんにご相談したところ、子ども達の為に公園課への交渉を引き受けてくださった。最初は許しがたい難色を示していた公園課だったが、それでめげるような地域ではない。１年の節目に行われる〝公園整備活動の振り返り 兼 地域交流会〟で、50名以上の方々が集う中、町会長が「是非とも、町会としてこの植樹プロジェクトを応援したい！」と正面きって言ってくださった。それに反応するように、住民の皆さんからも「公園内に子ども達の歓声が響くことが、なんとまぶしく、自分たちが生きる励みになることか」という意見が相次いだ。これを機に、熱い想いを込めた要望書を公園課へ提出し、再三に渡って交渉を重ねた結果、

公園課からの許可がおりた！

〝植樹プロジェクト〟当日は、自主保育わくわくの家族が集い、地域の皆さんに見守られながら…、樹を植えた。子ども達が植樹を終えた後の、誇らしげな表情といったら！その満足そうな顔は、子どもだけじゃなく、大人も同様。ここまで実現するまでにどれだけ多くの人が関わったことだろう。皆で智慧を出しあい、行動し続けたからこそ、実現したのだ。1人だけでは実現できない夢を、この地域コミュニティがあってこそ実現できた1日だった。

これも日頃から、やりたいことを実現しようとする地域住民同士の繋がりと活動を積み重ねてきたからこそ…、である。この地域のリーダーであり皆から敬愛されている上部町会・会長荒川さんに「地域で大切にしていることはなんですか？」と尋ねたことがある。その言葉が忘れがたい。「インターネットをはじめ便利なものが溢れる現代社会では、相手の顔を見ながら／相手の目を見ながら／本心を感じながら、人と人が向き合う機会が減っているよね。でも、どんなに時代が変わっても、普遍的なのは〝人と人の繋がり・ふれ

あい〟なんだ。お互いの存在を感じあえる地域があれば、そのことが常に励みになるものなんだ。」と、仰った。

子ども達を真ん中にしながら、地域のみんなで力を出し合って植えたえのきの樹の下でその言葉を聞いた。見上げた樹は、見上げる必要がないぐらい小さく細っこく、ひょろひょろして頼りない。今すぐにみんなの期待する木陰を作り出せそうもない。えのきがしっかり根をはり大きく育つのは、これから何十年の歳月を要するだろう。でも、開発にめげず、夢見るように深く植えたこの樹を前に、地域がいつまでもこのよい循環を繰り返しながら育っていくことを願ってやまない。ＮＰＯ法人の職員として、私達にできること。地域住民と共に活動できる立ち位置にいるからこそ、その地域でつぶやかれる小さな声に耳を傾け、実現に力を出せる存在でありたい。

運営委員会委員長賞

つながりの結婚式

佐藤　綾奈　31歳（東京都多摩市）

２０１４年、春。入籍を済ませた頃、一度はやらないつもりだった結婚式を挙げるかどうか悩んでいました。

「結婚式はやらなくていいよ」という夫、「結婚式はしないの？」という両親や親戚。やるべきかやらないべきか迷いつつも、週末が訪れる度に式場やホテル、レストランなどを見て回りました。しかし、話を聞けば聞くほど、どこもやりたいと思えるような所がありませんでした。

決められた時間の中で、同じような流れの結婚式に高額な費用がかかる・・・

プランや式場を見ても、ワクワクしない・・・これが本当にやりたいことなのか・・・

いつまで経っても決まらない。やっぱり、結婚式はしなくてもいい・・・・そんな気持

ちになっていました。

でも、結婚式は、これまでの人生でお世話になった人々に感謝の気持ちを表す人生の節目なのに、無しにしてしまっていいのだろうか・・・

現実と心の底にある気持ちの矛盾を振り切るために、おもいきって、一から自分のアウトドアウェディングができないか模索しようと思い立ちました。

アウトドアウェディングは、野外で行う結婚式であり、日本ではあまり一般的ではありませんが、既存ルールがなく、自由に組み立てられるメリットがあります。ですがその分、設営から資材の準備、人員の確保、運営まで全部自分達で行わなくてはなりません。

本当に実現することができるのだろうか・・・

とにかく動いてみようと、私達はまず場所を探しはじめました。

お互い地方出身で遠方の親戚や友人が多いことを考慮して、都心から電車で1時間圏内のあきる野市にあるキャンプ場を見つけました。そこは、駅から徒歩圏内であり、尚且つ、机やイスやテントなどの設営資材が十分にそろっていました。ここなら、私たちでもでき

るかもしれない。

次なる課題は、アウトドアウェディングを手伝ってくれる人です。場所を探し始めた頃は、なるべく周りの人に迷惑をかけないように、自分たちでできることはやろうと思っていました。ですが、アウトドアウェディングの事例を見ていると、どうしても多くの人の力が必要なことになっていました。

上京して年月の浅い上に人見知りな性格の私にとって、東京で頼れる友人なども少なく、たくさんの人の力が必要なアウトドアウェディングは、本当に実現できるのか心配でした。一歩一歩進んでいるのに、不安が募っていく変な気持ちでした。

「まわりの人に相談してみようか・・・?」

夫の一言で、結婚式を野外で一から作ろうとしていることを、まわりの人々に相談しました。

まずは、元結婚式関係の仕事をしていたSくんに頼ってみました。

「9月にキャンプ場でウェディングをやろうと思っているんだけど、司会をやってくれ

ないかな?」

どんな反応がかえってくるのかドキドキしすぎて、返事が来るまでの数分はとても長く感じました。

「よろこんで、やらせてもらいます!」という返事から思わず「やったぁ〜」と二人で声を出して、ハイタッチ。

Sくんから返事をもらった週末、今度はデザイナーのAさんの自宅へ遊びに行くことにしました。会場やテーブルの装飾をAさん夫妻に相談してみようとお願いを切り出そうとしていた矢先、共通の友人であったSくんから話を聞いていたらしく、「アウトドアウェディングやるんでしょ?楽しそうだね、一緒に作ろう」と言ってもらえました。「えぇ〜、今からお願しようと思ったのに。ありがとう〜」と渡りに船といった状況でした。しかも、偶然遊びに来ていた、同じデザイナーのCさんも「おもしろそうだね。協力するよ」と手伝ってくれることになりました。

この心強い人々のおかげで、私達は本当にアウトドアウェディングができると確信し、

本格的に結婚式の準備を始めることにしました。一から結婚式を作る上での叶えたい想いは、既存のサービスを業者から買って提供するのではなく、周りの人たちの好きなことや得意なことを持ちよる形にすることでした。「アウトドアウェディングをやるんだ」という呼びかけをして、この想いを伝えると、さまざまな人が知恵や力を貸してくれました。

『――私はピアノで、お手伝いできるよ』

『――そういえばあの人は今パティシエしているから、お願いしてみたらいいんじゃないかな?』

そうやっていくうちに、どんどんと助けてくださる人々が集まってきました。

ケータリングの料理、音響、ピアノ演奏者、デザイナー、カメラマン、ヘアメイク、ウエディングプランナー、引き菓子を作ってくれるパティシエ、エコバックを作成してくれる染色家、似顔絵を書いてくれる画家、コーヒーを入れってくれるバリスタ・・・

周りの人ができることを集めると、自然な形ができてきました。

その中で聞こえてくる声。

「おもしろそうだね!この歳になると、結婚式ってけっこう参加してるから、どの結婚

式にいっても流れがマンネリになっちゃって、内容が楽しみってことはないけど、その結婚式は楽しみだわ！」

「この機材がそんな場所で役に立てるなんて嬉しいね。」

「そんな場所に私のお菓子が並ぶなんて、想像するだけでワクワクするわ。」

「そんな楽しい式に参加できるなんて、当日が楽しみになってきました。」

いろんな人から、自分の力がその場所に混ざることをとても楽しみにしている声がたくさん聞こえてきました。

ある日の夜、夫がこんな話を切り出しました。

「僕は、始めは正直結婚式はやらなくていいと思っていたけど、違うんだね。本当にやることにしてよかった。両親への説明は衝突もあって大変だったけど、根気よく説明したら『雨降って地固まる』だったし、普通の結婚式だと「会場で初めまして」になりそうな妻の友達とも仲良くなれた。結婚式って、新しい絆を作るための機会なんだね。」

「そうだね。結婚式をやることにして本当に良かったね。お金をかけてやることだけが、

結婚式ではないんだね。たくさんの人達と一緒になって何かを作り上げる機会を介して、分かちあえたことがたくさんあるよね。私達だけが楽しい結婚式じゃなくて、ゲストもすごく楽しみにしてる人がたくさんいるね。」

「そうだ、近所のそうちゃんも結婚が決まったみたいで、野外で式をすることにすごく興味をもっていたよ。今度、式が終わったら話を聞きたいって言ってたよ。」

「こんなふうに、まわりの人と助け合って作り上げる結婚式が日本中に広がって、つながりを作る機会がふえていいたらいいね。」

あと、二週間で結婚式。青空の下で『つながりの結婚式』ができますようにと願いをこめて作られた、てるてる坊主が風にゆれています。

きずなづくり大賞２０１４　～地域や家族の多様な「つながり」をつくろう～　事業概要

ひとり暮らしの人が増えている東京。
多様な背景をもつ人々が暮らしている東京。
再開発で高層住宅が増え、空き地や原っぱが減ってしまった東京。
そんな東京では、
家族や地域のきずなが人々にとって大切な支えになっています。
かけがえのない家族のつながりや、
家族のような地域のつながりを実感したり、
きずなを広げようとしている人の話を聞いたことはありませんか。
きずなづくり大賞事務局では、
家族や地域の「きずな」を感じた体験を募集しています。

主　催　社会福祉法人東京都社会福祉協議会

後　援　東京都
社会福祉法人東京都共同募金会

応募資格　(1)東京都内在住、在勤または在学の方
(2)東京都内のボランティア団体やＮＰＯ法人で活動している方

選考方法　運営委員会にて本審査を実施

選考基準
(1)自分の体験や実践が具体的に表現されているか
(2)地域の家族との関わりやつながりがテーマになっているか
(3)個人の体験を超えて、他の人や社会への応援メッセージになっているか

受付期間　平成26年7月1日～平成26年9月28日

きずなづくり大賞運営委員会

委員長
袖井　孝子（お茶の水女子大学　名誉教授）

委　員
井之上　喬（株式会社日本パブリックリレーションズ研究所　代表取締役社長、京都大学経営管理大学院特命教授）
松川　貴（東京新聞編集局次長）
髙橋　陽子（公益社団法人日本フィランソロピー協会　理事長）
山崎　敏子（NPO法人海外広報協会専務理事）
竹内　誠（東京都生活協同組合連合会　代表理事・専務理事）
梶原　洋（東京都福祉保健局長）
小濵　哲二（社会福祉法人東京都社会福祉協議会　副会長）

（敬称略）

ご協力いただいた企業の皆様

協賛

東京新聞

協力企業等

特定非営利活動法人モバイル・コミュニケーション・ファンド
七島信用組合
株式会社ユタカ
ＮＥＣネッツエスアイ株式会社

公募チラシ・ポスターデザイン協力

笠原　千夏（東洋美術学校　クリエイティブデザイン科　２年）

（敬称略）